

# 動詞と形容詞の否定形の形成過程

## —モンゴル語を母語とする JSL 年少学習者の場合—

ナイダン バヤルマー

### 1. はじめに

母国で半年間規則中心の文法指導を受けたが、来日後明示的で継続的な日本語指導を受けなくなった年少学習者の場合、文法知識がどのように形成され、発達していくのか。つまり、JFL で受けた規則中心の学習を JSL に入ったあとも活かしてさらに発達させていくのか、あるいは違った発達過程を見せるのかを明らかにするため、対象者が来日した直後から収集した発話データをもとに、活用する品詞として一番多く産出された動詞と形容詞の否定形に焦点を当てて分析を行った。

### 2. 先行研究

学習者の否定形の習得研究として、JFL 大学生を対象に縦断的研究を行った Kanagy(1994)は、学習が進むにつれ、否定の形態のパターンが増えること、そして、過去の否定形は非過去の否定形より、イ形容詞の否定形は他の品詞の否定形より習得が遅れることを明らかにした。これに対し、家村(1999)は JSL 留学生を対象に横断的に、家村(2001)は中国語母語話者大学生を対象に縦断的に行った研究の結果、Kanagy(1994)と同様、イ形容詞の否定形は他の品詞の否定形に比べて習得が遅れること、レベルが上がるにつれ否定の形態のパターンが増え、否定辞を分析的に使用するようになることを報告している。また、否定辞の活用形は主に中級以降に出現するが、それらの使用には問題が残ることを述べ、日本語の否定形には共通の道筋が存在することを指摘している。

一方、JSL 小学生を対象にした野呂(1994)は、自然発話データを扱って否定形の習得過程を分析した。その結果、イ形容詞には「じゃない」と「くない」が同時期に存在し、その後正用形に移行する。動詞は、最初は「一語文ない」が使用され、その後、正用形が多く使用されるようになるが、「じゃない」

や「核文+ない」も少数観察されることを報告している。

また、学習者がよく誤用を起こす「じゃない」の産出におけるストラテジーに焦点を当てた家村・迫田(2001)は、初級レベルでは、教えられていても知識としての否定形の定着は困難であり、運用の面でも、「じゃない」を否定辞のマーカ―として捉え、イ形容詞や動詞に付加してしまうという「付加のストラテジー」が存在することを明らかにし、それが誤用を生み出す要因の一つとなることを報告している。

以上否定形の習得研究から、日本語の否定形の習得には普遍的な発達過程があることがわかる。しかし、ほとんどの研究は成人学習者を対象にしたもので、年少者を対象にした野呂(1994)はあるが低学年の学習者であり、認知能力や学習能力が整ってきた中・高学年の学習者の習得研究は見当たらない。

### 3. 研究方法

#### 3.1 対象者

本研究の対象者は 2005 年 8 月に来日し、9 月から公立中学校 2 年に転校したモンゴル語母語話者男子生徒 1 名である。対象者は来日前母国で半年にわたって、週 1 回、1 回 3 時間程度日本語指導を受けた。来日した時点ではひらがな、かたかな、また漢字 10 個ぐらいいはできるが、日本語での会話はあまりできていなかった。転入した 9 月から 11 月まで入り込み授業でモンゴル語の通訳が付いていたが、取り出し授業による日本語の特別な指導などは受けなかった。家庭での使用言語は母語のモンゴル語である。

#### 3.2 データ

本研究では、対象者が来日した直後から収集したインタビューの発話データと、数は少ないが、日本人の友達や塾の先生との会話を扱った。また、デ

ータの不足を補うために自宅での会話のときに日本語で発話したことばや表現を記録した参与観察ノートを扱った。インタビューは月2回、1回10分から25分程度行った。話の内容は家族や学校、友達、そして日常生活でのことなどである。対象者が来日した直後の日本語が理解できないときに母語で質問し、できるだけ日本語で答えてくれるように指示した。

### 3.3 分析方法

発話データや参与観察ノートから動詞と形容詞の否定形を拾い、正誤判断や数量及び質的分析を行った。習得過程を詳細に分析するために、録音し、文字化した発話データを3ヶ月ごとに1期として全4期に分けた。誤用に関して、2種類に分けた。1)「おすれさせない」のように否定の活用ができないため起こした「活用による誤用」と、2)「見ません」のように正しく活用できるが、接続の仕方ができないための誤用と、「まだありません」のように表現全体を否定の意味として覚えたため過剰に使用する「使用による誤用」である。

## 4. 結果と考察

ここで、否定形の形成過程を見るために、まず、産出された否定形の中から正用の産出のみを拾って否定形の推移を提示する(図1,2)。その後、各期における否定形の発達過程を記述し、考察する。

### 4.1 動詞と形容詞の産出

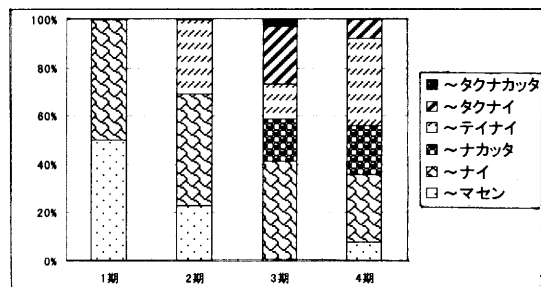


図1 動詞の否定形の正用産出とその内訳

動詞の否定形(図1)は、1期はマセンとナイしか産出されていない。しかし、ナイは8回産出された中7回は「わからない」であるのに対し、マセンは様々なことばで産出される。否定形は、来日前日本語を学習するときの教科書(「新日本語基礎I」)で、4課では動詞の「マセン・マセンデシタ」、形容詞は8課で「Na デハアリマセン・A クナイデス」のように導入されている。そして、来日後の言語使用

から、動詞否定形の「マセン」の産出が多く、誤用も見られなかったことから、習得されたと判断した。

2期はマセンとナイに加えてテイナイが、3期からナカッタ、タクナイ、タクナカッタなどが産出され、使用されるようになる。4期は3期に見られなかったマセンが先生との会話のときに出現し、それまで産出された否定形がほぼ同じ程度使用されるようになった。全体的に動詞の否定形にはナイとテイナイの使用が多い。

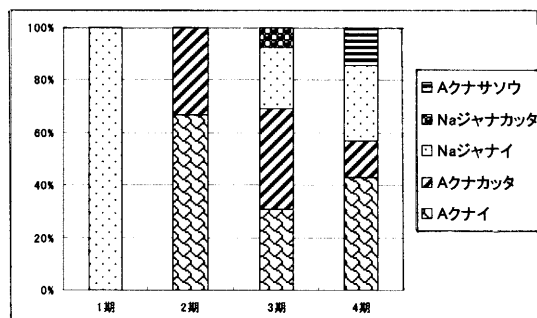


図2 形容詞の否定形の正用産出とその内訳

一方、形容詞の否定形の産出(図2)から、1期はナ形容詞の「好きじゃない」だけが正用形で産出されるが、イ形容詞の否定形は産出されたもののすべて誤用になる。そして、2期からイ形容詞の否定形が正用になり、さらに、その過去の否定形(Aクナカッタ)も正用形で産出される。しかし、3期にはAクナカッタもNaジャナカッタも正誤の繰り返しが観察される。また、3期には、様態を表す「Aクナサソウ」が初めて産出され、4期には、形容詞の否定形は全体的に誤用が見られなくなる。以上から、イ形容詞はナ形容詞に比べ産出も多く、習得が早い。そして、習得が進むにつれ否定のパターンが増えることがわかる。

以上、動詞と形容詞の否定形の正用の産出からその使用を見てきたが、以下、それぞれどのように発達過程を見てみたい。

### 4.2 動詞と形容詞の否定形の発達過程

動詞の否定形の形態から、まず、1期はほとんど丁寧形の使用のみだったが2期以降普通形へと変更し、さらに、様々な否定形が出現し、使用されるようになった。しかし、1期は活用による誤用は見られないが、「~なくてもいいですか」の表現がまだ習得されていないため「行きませんか」、接続の仕方がわからないため「見ませんと思います」、もう部活に行かなくなったときに発話した「Q: 部活、

行っている？A：まだありません」のような誤用が見られた。また、2 期に産出されたテイナイは「覚えてない」のようにイが省略される。このようなことから言語能力が低い初期の段階で教科書や周りから受けるインプットを分析することなく定式表現として使用していることと考えられる。3 期から動詞の否定形はナカッタ、タクナイ、タクナカッタなど以前使用されたことのない否定形が産出され、誤用もまったく見られなかった。

一方、形容詞の否定形は、1 期は、ナ形容詞は「好きじゃない」と正用形で産出するが、イ形容詞は「おいしくじゃない」「かわくじゃない」「むずかしいじゃない」のようにジャナイをつけて誤用を起こす。学習者がこのようにジャナイを過剰に使用することについて、野呂(1994)は、初期段階にいる小学生は、全ての品詞に「ジャナイ」をつけることを、家村(1999)は、初級や中級レベルでは「ジャナイ」と「クナイ」は分析できないひとかたまりの否定辞として捉えること、家村・迫田(2001)は、学習者は「ジャナイ」に否定の機能を持たせて語に付加するという「付加のストラテジー」であると主張している。これらの研究で報告されているジャナイの誤用はどの品詞にもつけているのに対し、本研究の対象者の場合は、形容詞だけに見られた。つまり、動詞には活用による誤用が見られないが、形容詞にはジャナイをつけている。このことは、対象者が来日前 JFL で教科書中心の日本語指導を受けたためかと推測される。即ち、教科書は 10 課までしか学習できなかったが、それまで教科書は動詞から導入され、様々な形が出現し、使用されるが、形容詞はそれほど勉強できなかったため習得が遅く、誤用が多かったと思われる。

次いで、2 期は、ジャナイの過剰般化が見られなくなり、正用形で産出される。さらにその過去否定形は「楽しくなかった」のように正用形で出現した。しかし、3 期前半に「あかじゃなかった→あかいじゃなかった」のように再び誤用を起こすが、3 期後半には正用形になる。しかし、過去否定形は全体的に産出数が少なく、4 期にはまったく産出されなかったため習得されたとは判断し難い。ここから形容詞の否定形は、動詞のそれに比べて習得が遅く、特に、過去の否定形は変異性が高く習得が遅れることがわかる。

また、3 期の形容詞の否定形には、「あかじゃな

かった→あかいじゃなかった」、「静かじゃないかった→静かじゃなかった」のように考えたり、言い直したりすることが観察された。Kanagy(1994: 273)は、学習者が「takaku-nai-desu, takai- zya-nai-desu, oh it's one of those」のように何回も繰り返して産出することについて、母語である英語のシグナルを意識しており、疑わしい場合、いくつかのパリエーションを試してみてもその中の一つが正しいことを望んでいると解釈している。また、家村(1999)は、中級レベルで誤用が複雑になり、否定辞の活用が出現すると主張しているが、Kanagy(1994)も家村(1999)も分析していることではないかと思われる。本研究のデータからも、1 期と 2 期には、誤用の産出であってもこのような現象は見られなかったのに対し、3 期から観察されたことから、定式表現の段階から規則を用いて産出するようになってきていることと考えられる。

## 5. 総合的考察

JSL 年少学習者の否定形の産出から、動詞の否定形は初期の段階で正しく活用できるのに対し、使用が間違っているが、その後誤用を起こすことなく順調に習得されていった。形容詞の否定形は動詞のそれに比べて、産出が少なく、正誤の変異性が高く、習得が遅いことがわかった。ここから、動詞は、日常会話では使用が多いが、動詞の分類によって否定活用形のスキーマが作りにくい。つまり、動詞の否定形は、「ku→ka-nai; su→sa-nai; tsu→ta-nai; ru→ra-nai; ru→nai」のように活用形が複雑なためスロット付きスキーマを作りにくい一方、一つ一つの活用形のトークン頻度が高いためそれらを固まりとして覚えていく。これに対し形容詞の否定形は、使用が少なく、否定の活用形も少ない。つまり、「□+i→□+ku-nai; □+da→□+jya-nai」のようにスロット付きスキーマを作りやすい一方、トークン頻度が低いため固まりとして覚えにくいと考えられる。また、動詞と形容詞について、日本語教育学会編(2001: 448-449)では、形容詞は、述語に立ちうる用言のうちで、動詞に比べると 10 対 1 に近いぐらい異なり語数が少なく、意味の面では、動詞の多くが時間的に展開される動きや変化を表すのに対し、形容詞は静的で没時間的なものであると指摘されており、このような背景も動詞と形容詞の否定形の習得に影響したと推測される。

以上から、否定形の習得過程は、JFL で受けた規則学習を活かし、さらに発達させていくようなことは見られず、JSL で周りから受けるインプットをもとに新たに文法知識を形成させていることから、「どのような具体的な用法にどの程度さらされたのか、また、どのような言語表現を繰り返し聞いたのか」といった、実際の場面に基づく言語経験が、私たちの記憶、ひいては文法知識の形成に大きく影響を与える」(早瀬、堀田 2005: 78)と考える用法基盤モデルの考えと近いと見受けられる。

## 6.まとめと今後の課題

動詞の否定形は、日常会話での使用も、自らのアウトプットも多いため表現全体が定式表現として習得される。従って、誤用が少なく順調に習得され、否定形のスキーマが定着されていく。一方、形容詞の否定形は、動詞に比べ、日常会話での使用もアウトプットも少ないため「語幹+ジャナイ」というスロット付き表現<sup>2)</sup>の過程を通して習得される。しかし、ある程度習得が進んだ段階(3期以降)で分析が始まるが、正誤の変異性が高く習得が遅い。特に、過去否定形の習得が遅れる。

本研究は一学習者を対象にしたため結果を一般化することはできない。また、本研究では産出だけを見たが、今後、周りから受けるインプットも検討することと、否定形以外の活用形にはこのような習得過程が見られるのか、さらに規則中心の指導を受けた学習者と受けていない学習者の場合、文法知識がどう形成するのかなどを検討し、追及したいと思う。

### 注

1. 本研究で否定形として捉えるのは 1) 否定の意味で使っている動詞や形容詞のことば 2) 否定形で活用しなければならぬ、あるいは活用しようとする動詞や形容詞のことばである。
2. 定式表現は「固定した表現」と「スロット付きの表現」といった2種類からなり、前者は「How are you?」のように分析する必要はなく、全体で覚えられ、使用

されているものであれば、後者は「Can you \_\_\_?」のようにスロットに新たな語句を挿入したり、表現の前後に新たな語句を加えたりするものである(Weinert 1995)。

### 参考文献

- 家村伸子(1999)「日本語学習者における否定の習得に関する研究—横断的な発話資料に基づいて—」『広島大学教育学部紀要』第二部 48号、305-314。
- 家村伸子(2001)「日本語の否定形の習得—中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて—」『第二言語としての日本語習得研究』第46巻、63-81。
- 家村伸子・迫田久美子(2001)「学習者の誤用を生み出す言語処理のストラテジー(2)—否定形「じゃない」の場合—」『広島大学教育学部日本語教育学講座紀要』11号、43-48。
- ナイダン バヤルマー(2007)「モンゴル語を母語とする年少学習者の文法知識の形成過程—動詞と形容詞の活用形を中心に—」お茶の水女子大学大学院修士論文
- 日本語教育学会編(2001)『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- 野呂幾久子(1994)「第二言語における否定形の習得過程—中国人の子どもの事例研究—」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』第45号、1-12。静岡大学教育学部
- 早瀬尚子・堀田優子(2005)『認知文法の新展開 カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- Kanagy,R. (1994) Developmental sequences in learning Japanese. a look at negation. *Issues in Applied Linguistics* 5,255-278.
- Myles,F. Mitchell,R.& Hooper,J. (1999) Interrogative chunks in French L2:A basis for creative construction? *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 49-80.
- Tomasello,M. (2003) *Constructing a language:A usage-based theory of language acquisition*, Cambridge, MA:Harvard University Press.
- Weinert,R. (1995) The role of formulaic language in second language acquisition: A review, *Applied Linguistics*, 16, 180-205.

ないだん ばやるまー／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

bayarmaa\_n@hotmail.com